

「女子柔道における寝技の行動形態と戦術に関する研究」

(昭和63年11月30日 受理)

体育教室 橋 本 年 一

A Study on the Movement Patterns and Tactics of Groundwork Techniques in the Women's Judo Competition

Toshikazu HASHIMOTO

I はじめに

鳥羽らは、『柔道の競技の目標は、球技のような得点そのものを追求するよりも、1回の「出来ばえ」を追求する種目』としてとらえている。つまり、技の「出来ばえ」に対して「一本」、「有効」などの評価が審判の主観によって与えられる競技種目といえよう。松浪は、審判の主観が判定を決定する競技種目として、柔道の他に「体操・新体操・水泳の飛び込み・シンクロナイズド・スイミング」などをあげている。それらの競技と柔道競技の違いは、競技時間が決められてはいても、「一本」の評価が与えられると試合はそこで終了する点にある。即ち、他の種目が演技全体の総合評価であるのに対し、柔道は最後の“フィニッシュ”のみが評価の対象となる点である。特に投技においては、一瞬のうちに勝負が決まる危険性を伴うが、寝技の勝負は決まるまでに時間的余裕があるため、自分の実力をフルに発揮することが出来、「取りこぼし」が少ない。また投技に比べ客観的に評価されるなど国際競技で確実に勝利を収めるためには、今後益々寝技が重要なポイントを占めると考えられる。

筆者は、第2回福岡国際女子柔道選手権大会のゲーム分析を行ない、「女子の競技柔道では、寝技の巧拙が試合の勝敗を左右する重要な要因の一つであり、日本選手が世界で活躍するためには、寝技の強化が急務である」と提言した。このことは、その後の同大会における一本判定で勝負が決まった試合を投技・固技で比べてみても、その割合が漸次固技増の傾向にあり、同様にして男子の世界選手権と比べても、男女間で有意な差が認められ、女子柔道における寝技の重要性は益々高まっているといえよう。

一方、日本選手についてみると、選手自身も寝技の必要性を十分自覚し努力した結果、第4回大会から固技で負けた試合に比べ勝った試合が多くみられるようになり、進歩の跡は伺える。しかし、負けた内容を見ると、依然として投技に比べ固技が多く、今、日本選手に望まれることは、寝技の攻撃、防御両面の強化と投技からの連絡変化技などの工夫が

必要であろうと思われる。^{表1), 2), 3), 4)}

Ⅱ 研究目的

今日、日本選手の強化目標の一つとして寝技の攻撃・防御法、さらに投技からの連絡変化等の研究があげられる。また、それらの技術を実際の試合の場で有効に発揮するための戦術面での研究が必要であろうと思われる。

しかし、寝技に関するゲーム分析的な研究は、ほとんど行なわれていないのが現状である。

そこで本研究では、1987年12月に行なわれた第5回福岡国際女子柔道選手権大会の全試合161試合から、実際の試合の場で固技で勝負が決まるまでのプロセスを、行動形態とその内容について試行数と時間的観点から分析・検討し、試合のなかで寝技がどのように展開されているかを明らかにし、今後の課題を導きだすと共に、実際の試合の場でそれらを有効に駆使し勝利を収めるための戦術を導き出すことを目的とした。

この成果は、寝技の指導法、試合運びへの一助となり分析指標としても役立つものと思われる。

Ⅲ 研究方法

1 対 象

1987年12月に行なわれた第5回福岡国際女子柔道選手権大会における全試合、延べ161試合中、立ち姿勢から寝姿勢に移行直後に寝技を試行して勝負を決めようとする意志が認められた401形態を対象とした。

2 内 容

- (1) 今大会における寝技の概要
- (2) 立ち姿勢から寝技へ移行する行動形態とその内容
- (3) 寝技の攻撃時における行動形態とその内容
- (4) 審判規定第18条「待ての適用」中、(e)、(f)、(g)の占める割合^{注2)}
- (5) 固技で一本決まるまでに要した「寝技攻防時間」

ここでいう「行動形態」とは、立ち姿勢(立技)から寝姿勢(寝技)へ移行するパターンや寝技での攻撃を構成するパターンをいい、「行動形態の内容」とはそのパターンに存在する投技・固技をいう。^{注3)}

3 方 法

筆者考案の競技分析用紙を用い、柔道経験年数7～10年の九州工業大学柔道部員を検者および記録者として、3人1組で記録させた。分析にあたっては、立ち姿勢から寝姿勢に移行後、最初に攻撃をした選手の側からの視点で行なった。

IV 結果及び考察

(1) 今大会における寝技の概要

今大会、「一本」判定で勝負が決まった試合は63試合あり、その内固技は48試合、「一本」判定の76.2%を固技が占め、投技との比は年々固技増の傾向がみられた。^{R1)} また、投技での「一本」は、時間経過に伴って漸次減少の傾向がみられるが、固技では逆に、後半になるほど増える傾向がみられた。

表1 「一本」で勝敗が決まった技の内訳と時間分布

クラス (kg)	タイム 内訳 N	0～1分				1分～2分				2分～3分				3分～4分				計			
		投	抑	絞	関	投	抑	絞	関	投	抑	絞	関	投	抑	絞	関	投	抑	絞	関
-48	9		1				1	1	1	3				1	1			1	6	1	1
-52	10				1									4		1			8		2
-56	5	2					3											2	3		
-61	7					2	1				1		1	1	1			3	3	1	
-66	6	1						1	1	1	1		1					2	1	1	2
-72	8	1				2			1	1	2				1			4	2	1	1
+72	9	1					2				5			1				1	8		
open	9	1	2				1				1		1	2		1		2	6		1
小計	63	6	7		1	4	8	1	3	3	13		1	2	9	3	2	15	37	4	7
計	63	6		8		4		12		3		14		2		14		15		48	

表2 「一本」と「一本以外」判定比の推移

大会	内訳 試合数 N	一本		一本以外	
		試合数	%	試合数	%
2回	169	75	44.4	94	55.6
3回	181	80	44.2	101	55.8
4回	169	74	43.8	95	56.2
5回	161	63	39.1	98	60.9

次に、全試合161試合中寝技の攻防が占めた割合を試行数と時間的観点からみると、寝技の試行は、延べ401回の攻防が行なわれ、その内訳は、4分戦った試合308回、途中1本で終了した試合では93回であった。これは、1試合平均、2.5回、「一本」判定の63試合を除く4分間戦った試合(98試合)では、1試合平均、3.1回寝技の攻防が行なわれたことになり、4分間戦った98試合中1回も寝技の攻防が行なわれなかった試合は、僅か

9 試合 (9.2%) であった。

表 3 寝技の試行数とその時間分布

タイム	結果の区分	クラス (kg)									
		-48	-52	-56	-61	-66	-72	+72	open	計	
	試合数 (N)	20	23	22	25	19	15	17	20	161	
0～1分	4分	11	16	5	12	9	0	8	7	68	117
	途中一本	8	8	2	6	4	4	9	8	49	
1分～2分	4分	7	15	9	10	10	5	4	9	69	94
	途中一本	5	2	2	3	1	3	5	4	25	
2分～3分	4分	12	18	8	14	11	4	9	11	87	103
	途中一本	2	3	0	2	3	2	1	3	16	
3分～4分	4分	10	22	10	13	12	3	7	7	84	87
	途中一本	0	0	0	2	0	0	0	1	3	
計	4分	40	71	32	49	42	12	28	34	308	401
	途中一本	15	55	84	36	62	50	21	43	50	

これを時間的観点からみると、161試合の対戦時間は、延べ31642秒（1試合平均196.5秒）行なわれ、その内寝技の攻防は9541秒（1試合平均59.3秒）、延べ対戦時間の30.2%は寝技の攻防が占めていることになる。

表 4 試合のなかで寝技の占める割合

(単位: sec) () 内は1試合平均

内 訳	クラス (kg)									
	-48	-52	-56	-61	-66	-72	+72	open	計	
試合数 (N)	20	23	22	25	19	15	17	20	161	
延べ試合時間 (一試合平均)	3875 (193.8)	4461 (194.0)	4410 (200.5)	5416 (216.6)	3878 (204.1)	2643 (176.2)	3133 (184.3)	3826 (191.3)	31642 (196.5)	
延べ寝技時間 (一試合平均)	1423 (71.2)	1876 (81.6)	780 (35.5)	1550 (62.0)	922 (48.5)	678 (45.2)	1259 (74.1)	1053 (52.7)	9541 (59.3)	
寝技時間 試合時間 × 100 (%)	36.7	42.1	17.7	28.6	23.8	25.7	40.2	27.5	30.2	

また、寝技の試行数と「一本」試合との関係を試合の流れの中で分析してみると、試行数は、試合開始からの1分間で117回 (29.2%) と最も多く、ラストの1分間が87回 (21.7%) と最も少なかった。このことは、一本試合ではほぼ同様の傾向がみられるが、4分間戦った試合では「2分～3分」の間が最も多く、むしろ後半に多くみられた。これを「一本」

に結び付いた確率の上からみると、全体では、12.0%、8.4回に1回となる。さらに試合の流れの中では、時間経過に伴って漸次高くなっており、特にラストの一分間では、16.1%、4.2回に1回の確率で決まっている。これらのことから、女子の競技柔道における寝技の占める割合の大きさや、試合時間の後半に行なわれる寝技の攻防が試合結果に大きな影響を及ぼしていることなど寝技の重要性が伺える。

表5 寝技の試行数と「一本」の関係

()内は「一本」の決まった割合

クラス 級 内訳 タイム	-48	-52	-56	-61	-66	-72	+72	open	計
	試行:一本	試行:一本	試行:一本	試行:一本	試行:一本	試行:一本	試行:一本	試行:一本	試行:一本
0~1分	19:1 (5.3)	24:5 (20.8)	7:0	18:0	13:0	4:0	17:0	15:2 (13.3)	117:8 (6.8)
1分~2分	12:2 (16.7)	17:0	11:3 (27.3)	13:1 (7.7)	11:2 (18.2)	8:1 (12.5)	9:2 (22.2)	13:1 (7.7)	94:12 (12.8)
2分~3分	14:3 (21.4)	21:0	8:0	16:1 (6.3)	14:2 (14.3)	6:2 (33.3)	10:5 (50.0)	14:1 (7.1)	103:14 (13.6)
3分~4分	10:2 (20.0)	22:5 (22.7)	10:0	15:2 (13.3)	12:0	3:1 (33.3)	7:1 (14.3)	8:3 (37.5)	87:14 (16.1)
計	55:8 (14.5)	84:10 (11.9)	36:3 (8.3)	62:4 (6.5)	50:4 (8.0)	21:4 (19.0)	43:8 (18.6)	50:7 (14.0)	401:48 (12.0)

(2) 立ち姿勢から寝技へ移行する行動形態とその内容

まず、寝技で勝負を決する前提条件となる立ち姿勢から寝技へ移行する行動形態について、投技を試行して寝技に転じて攻める形態を「先の先的移行」とし、相手の投げ技を利用して寝技に転じて攻める形態を「後の先的移行」ととらえ、その試行数を比べてみた。

表6-1 立ち姿勢から寝技へ移行する行動形態

クラス 級 移行形態 タイム	-48	-52	-56	-61	-66	-72	+72	open	計
	B-B:A-B	B-B:A-B	B-B:A-B	B-B:A-B	B-B:A-B	B-B:A-B	B-B:A-B	B-B:A-B	B-B:A-B
0~1分	7:12 19	13:11 24	3:4 7	4:14 18	4:9 13	1:3 4	3:14 17	6:9 15	41:76 117
1分~2分	3:9 12	5:12 17	6:5 11	4:9 13	2:9 11	1:7 8	5:4 9	1:12 13	27:67 94
2分~3分	4:10 14	5:16 21	4:4 8	8:8 16	5:9 14	2:4 6	2:8 10	3:11 14	33:70 103
3分~4分	2:8 10	6:16 22	2:8 10	3:12 15	2:10 12	2:1 3	1:6 7	3:5 8	21:66 87
計	16:39 55	29:55 84	15:21 36	19:43 62	13:37 50	6:15 21	11:32 43	13:37 50	122:279 401

B-B……「先の先的移行」
A-B……「後の先的移行」

られるが、「一本」に結び付いた確率の上からは、2分～3分の間が高く、「先の先的移行」に比べ勝負が遅いようである。

表7-1 「一本」に結び付いた寝技へ移行する行動形態

クラス 移行形態 タイム	-48		-52		-56		-61		-66		-72		+72		open		計	
	B-B	A-B	B-B	A-B	B-B	A-B	B-B	A-B	B-B	A-B	B-B	A-B	B-B	A-B	B-B	A-B	B-B	A-B
0～1分	2	1	5	0	1	0	1	0	0	2	0	1	1	1	1	2	11	7
	3		5		1		1		2		1		2		3		18	
1分～2分	2	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	3	1	0	6	6
	3		0		2		1		0		1		4		1		12	
2分～3分	1	1	2	2	0	0	0	0	0	2	1	1	0	1	1	1	5	8
	2		4		0		0		2		2		1		2		13	
3分～4分	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	2	3
	0		1		0		2		0		0		1		1		5	
計	5	3	7	3	2	1	3	1	0	4	1	3	2	6	4	3	24	24
	8		10		3		4		4		4		8		7		48	

「A-B」の中には、防御から攻撃に転じ逆転勝ちした5試合を含む

表7-2 「一本」に結び付いた寝技へ移行する行動形態の内容

移行形態 内容 タイム	先の先					小計	後の先				小計	防→攻	計
	A	B	C	D	E		S	X	Y	Z			
0～1分	3	2	6	0	0	11	2	0	0	5	7	0	18
1分～2分	1	2	2	1	0	6	0	1	0	1	2	4	12
2分～3分	3	0	2	0	0	5	0	1	0	6	7	1	13
3分～4分	0	0	2	0	0	2	1	1	0	1	3	0	5
計	7	4	12	1	0	24	3	3	0	13	19	5	48

これらのことから、立ち姿勢から寝技への移行は、早い時間帯に積極的に投技を試行し、引き続き寝技に転じて攻める方法が有効であるといえよう。

(3) 寝技の攻撃時における行動形態とその内容

寝技へ移行後の攻撃形態を「仰向けの相手と向かい合い上から攻める形態」(以後、F-Oとする)、「うつ伏せあるいは四つんばいの相手を上から攻める形態」(以後、B-Oとする)「相手の下に入り、自分が仰向けから攻める形態」(以後、F-Uとする)と分類

し、その試行数をみると、延べ518回の攻撃形態がみられ、その内訳は、「F-O」、138回 (26.6%)、「B-O」、364回 (70.3%)、「F-U」、16回 (3.1%)と「うつ伏せの相手を上から攻める」攻撃形態が多くみられる。さらに、その内容をもて、「B-O」から「抑込技」で極めようとする攻撃形態が248回と全体の47.9%を占めている。このことは、寝技への移行形態と密接な関係があるであろうと推察される。

表 8-1 寝技攻撃時の行動形態とその内容

クラス 別 攻撃 形態	-48			-52			-56			-61			-66			-72			+72			open			計		
	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関
F-O	16	1	4	31	0	3	10	0	0	14	0	1	13	2	1	4	1	0	14	0	0	21	0	2	123	4	11
	21			34			10			15			16			5			14			23			138		
B-O	28	9	7	52	8	6	22	3	3	47	14	13	20	12	7	16	6	4	29	11	8	34	1	4	248	64	52
	44			66			28			74			39			26			48			39			364		
F-U	8	0	0	1	0	0	2	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	14	1	1
	8			1			3			1			2			1			0			0			16		
計	52	10	11	84	8	9	34	3	4	62	14	14	34	15	9	21	7	4	43	11	8	55	1	6	385	69	64
	73			101			41			90			57			32			62			62			518		

F-O……「仰向けの相手と向かい合い上から攻める形態」

B-O……「うつ伏せあるいは四つんばいの相手を上から攻める形態」

F-U……「相手の下に入り自分が仰向けから攻める形態」

表 8-2 寝技の移行形態別攻撃形態とその内容

移行形態 別 攻撃 形態	A・B・C			D			E			H			S・X・Y・Z			防→攻			小計			計
	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	
F-O	44	1	3	7	0	0	0	0	0	2	0	0	56	3	8	14	0	0	123	4	11	138
B-O	43	14	6	7	1	0	2	1	2	7	1	0	166	42	35	23	5	9	248	64	52	364
F-U	3	0	0	3	0	0	2	0	0	0	0	0	5	1	0	1	0	1	14	1	1	16
小計	90	15	9	17	1	0	4	1	2	9	1	0	227	46	43	38	5	10	385	69	64	518
計	114			18			7			10			316			53			518			

一方、「一本」に結び付いた攻撃形態では、「F-O」が30試合 (62.5%)と最も多く、次いで「B-O」の18試合 (37.5%)、「F-U」からの一本勝ちは見られない。攻撃形態の内容をもて、「F-O」からの「抑込技」が27試合 (56.3%)と最も多くみられ、「一本」に結び付いた確率でも、「F-O」21.7%、「B-O」4.9%と仰向けの相手と向かい合い上から攻める攻撃形態が勝ちに結び付く確率が高いようである。

表9-1 「一本」に結び付いた寝技攻撃時の行動形態とその内容

クラス 内容 攻撃形態	-48			-52			-56			-61			-66			-72			+72			open			計		
	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関
F-O	5			6	2	2	2			1			1			4			6	1		27	0	3			
		5			8			2			2			1			1			4			7			30	
B-O	1	1	1	2			1			1	1			1	2	1	1	1	4						10	4	4
		3			2			1			2			3			3			4						18	
F-U																											
計	6	1	1	8	0	2	3	0	0	3	1	0	1	1	2	2	1	1	8	0	0	6	0	1	37	4	7
		8			10			3			4			4			4			8			7			48	

表9-2 移行形態別「一本」に結び付いた寝技攻撃時の行動形態とその内容

移行形態 内容 攻撃形態	A・B・C			D			E			S・X・Y・Z			防→攻			計		
	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関	抑	絞	関
F-O	15		2	1						9		1	2			27	0	3
		17			1						10			2			30	
B-O	4	1	1							4	2	3	2	1		10	4	4
		6									9			3			18	
F-U																		
計	19	1	3	1	0	0	0	0	0	13	2	4	4	1	0	37	4	7
		23			1			0			19			5			48	

これらのことから、攻撃の機会としては立ち姿勢からの移行形態と密接な関係を持つと考えられる「うつ伏せあるいは四つんばいの相手を上から攻める」形態が非常に多い。その割にチャンス逃しているケースが目につく。このことは、「抑込技」に固執するための結果とも考えられ、現行ルールの中で固技で勝利を収めるためには、「絞技」・「関節技」等をも駆使して、早く相手を危険な状態までもっていく方法が必要と考えられる。

一方、今日の選手の多くは、下になった場合に、なす術もなく四つんばいになり防衛に専心するケースが多い。寝技の勝負で下になることは必ずしも不利な体勢ではなく、仰向けで相手と相対した場合には、両手両足が使えるしろ攻撃するに有利な体勢であり、「絞技」・「関節技」などを駆使して積極的に攻撃する工夫が必要であると思われる。これら

の攻撃方法を身に付けることによって、勝利に結び付ける確率はさらに高くなるものと推察され、今後の重要な課題のひとつといえよう。

(4) 審判規定第18条「待ての適用」中(e)、(f)、(g)の占める割合

今回寝技の攻防は401回試行され「一本」に結び付いたのは、48試合であった。即ち353回は、何らかの理由で寝技の攻防が中断され、言い換えれば「一本」極めるチャンスを今回逃したとも言えよう。そこで、353回の中断の中から、国際柔道連盟試合審判規定第18条「待ての適用」中、「(e)、寝技で双方が足揃みなどの形になって試合に変化のないとき」、「(f)、試合者の一方が他方を背負いながら寝技から立ち姿勢乃至は半ば立ち姿勢に移ったとき」、「(g)、試合者の一方が立ち姿勢をとり、あるいは寝技から立ち姿勢に移り、畳みに背をつけ足を立ち姿勢の試合者の身体に巻き付けている相手を畳から引き上げたとき」によって寝技の攻防が中断したケースを取り上げてみた。これをみると、「(e)」による「待て」宣告は20回、「(f)」による「待て」宣告23回、「(g)」による「待て」宣告20回と、63回の中断がみられた。これは、全中断353回中の17.8%に相当する。これらの中断は、二重揃みの抜き方や相手の上体や四肢を固め自由を制する方法を身に付ければ勝ちに結び付ける可能性がさらに出てくると推察され、これもまた今後の課題のひとつとなろう。

表10 第18条「待ての適用」中(e)、(f)、(g)に該当する寝技の試行数

内 訳	試行数
(e) 寝技で双方が足揃み等の形になって試合に変化のないとき	20
(f) 試合者の一方が他方を背負いながら寝技から立ち姿勢乃至は半ば立ち姿勢に移ったとき	23
(g) 試合者の一方が立ち姿勢をとり、あるいは寝技から立ち姿勢に移り、畳に背をつけ足を立ち姿勢の試合者の身体に巻き付けている相手を畳から引き上げたとき	20
計	63

(5) 「一本」決めるまでに要した「寝技攻防時間」

現行ルールの中で固技で勝負を極めようとするとき、非常にルール上の制約があり、一気に相手を危険な情態まで持ち込むスピードある攻撃が要求される。そこで、「一本」に結び付いた48試合の「一本」極めるまでに要した「寝技攻防時間」を行動形態別にみてみた。

これをみると、「一本」に結び付いた寝技の攻防時間が1試合平均22秒であった。これを、「移行形態」別にみると、「先の先的移行」13.8秒、「後の先的移行」30.2秒と、「先の先的移行」の方が勝負が早い。次に、「攻撃形態」別にみると、「F-O」16.4秒、「B-O」31.4秒と「F-O」の方が勝負が早い。さらに「固技の内容」別にみると、「抑込技」17.9

秒、「絞技」47.3秒、「関節技」29.3秒と「抑込技」が勝負が早いようである。

表11 行動形態別「一本」に結び付いた寝技の攻防時間
(単位: sec) ()内は1試合平均

移行形態 攻撃形態 内容	B-B N=24		A-B N=24		計 N=48	
	F-O N=18	B-O N=6	F-O N=12	B-O N=12	F-O N=30	B-O N=18
抑込技 N=37	176/16 (11.0)	99/4 (24.8)	274/11 (24.9)	113/6 (18.8)	450/27 (16.7)	212/10 (21.2)
	275/20 (13.8)		387/17 (22.8)		662/37 (17.9)	
絞技 N=4	0	17/1 (17.0)	0	172/3 (57.3)	0	189/4 (47.3)
	17/1 (17.0)		172/3 (57.3)		189/4 (47.3)	
関節技 N=7	31/2 (15.5)	9/1 (9.0)	10/1 (10.0)	155/3 (51.7)	41/3 (13.7)	164/4 (41.0)
	40/3 (13.3)		165/4 (41.3)		205/7 (29.3)	
合計 N=48	207/18 (11.5)	125/6 (20.8)	284/12 (23.7)	440/12 (36.7)	491/30 (16.4)	565/18 (31.4)
	332/24 (13.8)		724/24 (30.2)		1056/48 (22.0)	

V まとめ

本研究は、女子の競技柔道のなかで寝技についてとらえ、固技で勝負が決まるまでのプロセスを、行動形態とその内容について、試行数と時間的観点から分析・検討し、実際の試合の場で、寝技がどのように展開されているかを明らかにし、今後の課題を導きだすと共に、実際の試合の場でそれらを有効に駆使し勝利を取るための戦術を導きだすことを目的とした。そして以上述べてきたような結果から、女子柔道における寝技の行動形態の傾向をみると、次のような指摘がされる。

- (1) 寝技の試行は延べ401回行なわれ、試合開始からの1分間が最も多かった。
- (2) 寝技の攻防時間は1試合平均59.3秒、延べ対戦時間の30.2%を占めていた。
- (3) 「一本」に結び付いた試合では、ラストの1分間(3分~4分)の確率が高かった。
- (4) 寝技への移行は、「後の先的移行」、特に相手の投げ技を利用して潰す、あるいは崩して寝技に転じて攻める形態が多用されていた。
- (5) 「一本」に結び付いた試合の移行は、「先の先的移行」特に、「腰技」を試行して寝技に転じて攻める形態の確率が高かった。
- (6) 寝技での攻撃は、うつ伏せあるいは四つんばいの相手を上から攻め、「抑込技」で

極めようとする形態が多用されていた。

- (7) 「一本」に結び付いた試合の攻撃は、仰向けの相手と向かい合い上から攻め「抑込技」で極める形態が多用され、確率の上からは「関節技」の確率が高かった。
- (8) 今回、固技で極めるチャンスを逃した353回の攻防中、国際柔道連盟試合審判規定第18条「待ての適用」、「e」・「f」・「g」で逃した試合は63回、17.8%であった。
- (9) 「一本」に結び付いた試合の1試合平均の寝技攻防時間は22秒であった。
- (10) 行動形態別の寝技の攻防時間が短いのは、「先の先的移行」、「仰向けの相手と向かい合い上から攻める形態」、「抑込技」であった。

これらのことにより、実際の試合の場で固技で勝負を決めることを主意とした場合、そのチャンスが多く今後の課題として研究が必要なことは、次のようなことがいえる。

- (1) 相手の掛けてきた投技を潰す、あるいは崩す方法。
- (2) うつ伏せあるいは四つんばいの相手を上から攻め、早く相手を仰向けにするなど危険な状態までもっていく方法。
- (3) 二重搦みを抜く方法。
- (4) 相手の上体や四肢を固め、自由を制する方法。
- (5) 「絞め」・「関節技」で早く極める方法。
- (6) 相手の下に入り、自分が仰向けから攻める方法。

また、実際の試合に即した勝利に結び付ける確率の高い寝技の戦術としては、次のようなことがいえる。

- (1) 最終的に固技で決めようとする意志をもって、早い時間帯に積極的に投技を試行して、寝技に移行する。
- (2) ワンパターンの寝技への移行ではなく「引き込み返し」、「捨身技」、「巻き込み技」など状況に応じた多彩な攻撃方法を駆使して移行する。
- (3) 移行後は直ちに相手を仰向きの状態にして攻撃する。
- (4) 抑え技をもって相手の上体や四肢を固め自由を制する。
- (5) ここまでの動作を一連の動きのなかでスピーディにおこない、相手を危険な状態まで一気に持ち込む。
- (6) 状況に応じて「抑込技」・「絞め」・「関節技」を駆使して極める。

今回の研究から、以上述べてきたようなことが明らかとなった。

最後に、アンケート調査を実施して下さった日本女子大学の安藤慶子先生、ならびに協力いただいた強化選手の皆様、さらに今回のデータ作成に協力いただいた九州工業大学の柔道部の皆様に心からの感謝の意を表します。

〈参考資料〉

ここに示した参考資料は、女子柔道における寝技の必要性を明らかにする目的で使用した。この内、資料の(1)、(2)、(4)は筆者が、第39回の日本体育学会で発表の資料として作成したものである。また資料の(3)は、日本女子大学の安藤慶子先生が作成したアンケートに筆者の寝技に関する質問項目を加えてもらい、全日本の女子強化選手を対象として、昭和63年秋の強化合宿中に調査してもらっ

たものである。

資料1 「一本」判定中投技と固技比の推移

大会	内訳 試合数 N	投技		固技	
		試合数	%	試合数	%
2回	75	25	33.3	50	66.7
3回	80	22	27.5	58	72.5
4回	74	20	27.0	54	73.0
5回	63	15	23.8	48	76.2

資料2 「一本」で勝敗が決まった試合での男・女間の投技・固技比

大会名	内訳 試合数(%)	投技		固技	
		試合数	%	試合数	%
第14回世界柔道選手権大会	104	53	51.0	51	49.0
第5回福岡国際女子柔道選手権大会	63	15	23.8	48	76.2

資料3 寝技に関するアンケート N=26

質問項目	回答の内訳	はい	いいえ	どちらともいえない
1 国際試合（外人相手）では、寝技が有効だと思いますか		16	1	9
2 外人選手は抑込技が上手（強い）と思いますか		9	2	15
3 外人選手は絞技が上手（強い）と思いますか		8	6	12
4 外人選手は関節技が上手（強い）と思いますか		22	0	4
5 日本選手の寝技のレベルは外人選手に比べて勝っていると思いますか		6	1	19
6 あなたは寝技に自信がありますか		4	14	8

資料4 日本選手の勝敗別投技と固技比の推移

大会	勝った試合				負けた試合			
	投技		固技		投技		固技	
	試合数	%	試合数	%	試合数	%	試合数	%
2回	5	41.7	7	58.3	8	36.4	14	63.6
3回	2	25.0	6	75.0	4	22.2	14	77.8
4回	5	27.8	13	72.2	8	40.0	12	60.0
5回	5	26.3	14	73.7	4	30.8	9	69.2

引用・参考文献

- 1) 鳥羽泰光 他：「格技における技術の一般化を志向する基礎的研究—柔道とサンボの技等の類似性について—」日本体育大学紀要、16巻2号、96、1987
- 2) 松浪健四郎：「格闘技バイブル」ベースボールマガジン社、1988
- 3) 橋本年一 他：「柔道競技における戦術の研究—女子柔道のタイム・スタディによるゲーム分析—」九州工業大学研究報告（人文・社会科学）第34号、63-74、1986
- 4) 橋本年一 他：「女子柔道のゲーム分析」、日本体育学会第36回大会号、742、1985
- 5) 橋本年一 他：「第2回福岡国際女子柔道選手権大会のゲーム分析—日本選手と優勝選手の比較—」日本体育学会第36回大会号、743、1985
- 6) 国際柔道連盟：「国際柔道連盟試合審判規定—1985年改訂版」、30-31、1985
- 7) 橋本年一：「柔道競技における戦術の研究—第14回世界柔道選手権大会のゲーム分析—」九州工業大学研究報告（人文・社会科学）、第35号、29-39、1987
- 8) 稲垣安二：「スポーツ競争の戦術に関する一試論」日本体育大学紀要、第九号、1-11、1987
- 9) 尾形敬史 他：「女子柔道国際大会の試合分析」武道学研究、17（1）：82-83、1985
- 10) 徳田喜平 他：「柔道固技の発達とその技術構造に関する考察—四高を中心とした高専柔道から—」金沢大学教育学部紀要（教育科学編）第34号、207-220、1985
- 11) 木村昌彦 他：「女子柔道における競技分析的研究 その1」防衛大学校紀要（社会科学編）、第56輯、61-74、1988
- 12) 橋本年一：「女子柔道における寝技の行動形態に関する研究」日本体育学会第39回大会号、B、692、1988
- 13) 橋本年一：「新しい体育実技の方法」学術図書出版社、100-124、1988

注 記

- 注1) 柔道で総合評価がなされるのは、国際柔道連盟試合審判規定第20条「試合終了」中「(f) の (iii)。スコアが全然記録されていないか、それぞれのスコアの項目（技あり、有効、効果）が全く同じである場合…」即ち、両者ポイントが無い場合と同ポイントの場合のみである。
- 注2) 国際柔道連盟試合審判規定第18条「待ての適用」中「(e). 寝技で双方が足揃みなどの形になって試合に変化のないとき」、「(f). 試合者の一方が他方を背負い乍寝技から立ち姿勢乃至は半ば立ち姿勢に移ったとき」、「(g). 試合者の一方が立ち姿勢をとり、あるいは寝技から立ち姿勢に移り、畳みに背をつけ足を立ち姿勢の試合者の身体に巻きつけている相手を畳から引き上

げたとき」で試合が中断したものを取り上げた。

- 注3) 今回、寝技への移行形態の内容で、立ち姿勢からの「絞技」・「関節技」がみられなかったため「投技」とした。
- 注4) ここでいう「寝技攻防時間」とは、立ち姿勢から寝姿勢に移行後、寝技の攻防が始まった時点から、「抑込技」については「抑込み」の宣告のあった時点、それ以外は「参った」の意思表示があり、試合が終了した時点までに要した時間をいう。